

教育実践を通じて 指導者を育成

社会医療法人杏嶺会は急性期から回復期、維持期まで一気通貫で医療を提供する。その中で主に急性期を担うのが、一宮西病院だ。2001年開設で歴史は浅いが、「どんな病気も診療できる一般病院を作りたい」という理事長の上林弘和氏の考えの下、25の診療科をそろえた“総合病院”に成長した。2008年に17.1日だった平均在院日数は2012年に13.6日となり、着実に短縮している。

その一因となったのが、リハビリの充実だ。80人以上のリハビリスタッフを配置し、心大血管疾患、脳血管疾患、運動器、呼吸器すべてでリハビリ料（I）の基準を満たす。「職員数はここ5年ほどで倍増した」と、杏嶺会リハビリテーション科統括部長の平木淳氏は言う。

マンツーマン指導の充実目指す

一方で、スタッフの急増に伴い表面化したのが、教育体制の問題。短期間で職員が急増した結果、経験の浅い20～30代前半が大半になり、若手を教育できる人材の育成が課題として浮き彫りになった。さらに、報酬面では集団療法が2006年に廃止されて個別療法のみとなり、各スタッフが一対一で患者の治療に当たらなければ収入につながらなくなってしまった。このため、臨床現場でのマンツーマンでの指導がしづらくなった。

そこで、脳神経外科や整形外科などの十数人のチームごとに週1～2回、症例検討会を開くとともに、指導者である経験10年程度の中堅職員が新人の年間教育プログラムを作成。整形外科なら、代表疾患の手術内容や機能回復訓練の進め方、実技の要所など、若手が身に付けるべき知識や技能を整理した。

一宮西病院リハビリテーション科科長の田中和彦氏は、「新人教育は、指導者の知識や技術の整理だけでなく、急拡大した当科の教育体制の整備にも役立った。プログラムの改訂を重ね、今では経験5年前後の職員が新人を教育できる形になった。その分、経験10年の職員は、管理業務など次のステップの仕事に従事できるようになった」と話す。



所在地:愛知県一宮市

病床数:一般400床(7対1病床341床、回復期リハビリ病床49床、ICU10床)

リハビリスタッフ数:83人(PT47人、OT22人、ST11人ほか)



杏嶺会リハビリテーション科統括部長の平木淳氏(左)と一宮西病院リハビリテーション科科長の田中和彦氏

時間が足りないマンツーマン指導を補うため、若手が休みの日にその担当患者をベテランが見て、適切にリハビリできているかを点検する工夫も凝らす。「逆にベテランが休みの時に若手が代わりに患者を見れば、先輩がリハビリをどう進めてきたか学べる」と平木氏。

今後は、マンツーマン指導を充実させる体制を模索する考え。ベテランが毎月決まった時間を指導に充てるといった仕組みを検討する。将来は研修センターを開設し、法人内だけでなく地域医療に貢献できる人材育成も視野に入れる。「職員にとってもキャリアパスの選択肢が増える」と田中氏は話している。